

複合語と投射の原理：

英語における二つの -ING 形

宮 本 節 子

1. 1. 序

本稿では、生成形態論の立場から、 $X+V\text{-ing}+Y$ のような表層構造を持つ総合的複合語¹⁾(Synthetic Compound—以下 SC と略す)を取りあげ、 $[X+V]$ と $[Y]$ との関係、及びこの二つを結ぶ接辞 -ing の特質を項構造の投射の観点から明らかにすることをねらいとする。

1. 2. $X+V\text{-ing}+Y$ と項構造

本稿で取り扱うのは、典型的には次のような3語から成る構造である。

- (1) a. fast growing corn
- b. trout fishing reel

これらの例において、動詞と共起する語は、動詞との文法関係及び主題関係という二つのレベルで分析することが可能である。文法関係については、Lieber (1983) に従い、主語項を外項 (external argument)²⁾、主語以外の義務項を内項 (internal argument)、それ以外を意味項 (semantic argument) と呼ぶことにする。主題関係については、変形文法で一般に使われている動作主 (agent)、主題 (theme)、道具 (instrument) 等の分類を採用する。この文法関係と主題関係という二つのレベルは例(1a)(1b)に次のような表示を与える。

- (2) a. fast growing corn
 文法関係 [意味項] [外項]
 主題関係 [主題]
- b. trout fishing reel
 文法関係 [内項] [?]
 主題関係 [道具]

この分野における主要な提案 (Roeper-Siegel (1978), Allen (1978), Selkirk (1982), Lieber (1983), etc.) がほぼ一致して主張しているのは、V-ing の前の位置、即ち X には動詞の主語以外の義務項、あるいは、義務項のない場合には意味項が実現されるという点である。この提案は基本的には正しいものであると言えるが、Y の特質の解明には何の手がかりも与えない。これは彼らのデータへのアプローチの当然の結果と言える。なぜなら、彼らの対象としたのは [X+V-ing] の構造であったからである。

では、なぜ Y の位置へは関心が向けられなかったのであろうか。それは、彼らが X+V-ing+Y を、常に [X+V-ing]_A という SC 形容詞と被修飾語の名詞 Y から構成されていると考えたからであろう。確かに、形容詞と名詞という連鎖である限り、その二者の間に統語的制約はないと考えても不思議はない。しかし、この前提はいかなる場合も有効であろうか。次のデータは X+V-ing+Y の文法性に Y が何らかの理由で関与していることを示している。

- (3) a. [lightly stepping] woman
 b. * [lightly stepping] hall

(3a)と(3b)の文法性の差は単に Y 位置にある語 *woman* と *hall* の違いから生まれている。動作主を表わし外項を担う *woman* が現われている(3a)は容認されるのに対し、場所を表わし意味項を担う *hall* の現われている(3b)は容認されない。このことから、明らかに、Y 位置が何らかの影響を X+V-ing+Y 全体の文法性に与えていることがわかる。

まず、次節で、SC を扱った代表的研究を上記の問題に則して調べてみることにする。

2.1. Roeper and Siegel の語彙変形理論

Roeper-Siegel (1978) は、Chomsky (1961) の Aspect Model の枠組における最初の SC を取り扱った研究である³⁾。この中では SC は三つの接辞 -ed, -ing, -er を持つもののみに限られる。この理論の基礎となっているのは、文における動詞句と SC との間に見られる平行関係の観察である。

- (4) a. play checkers — checker playing
 b. sound strange — strange sounding

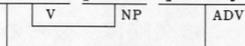
この観察を土台として、X+V-ing の X 位置に現われる語を説明するために、次のような第一姉妹の原理が提案された。

- (5) 第一姉妹の原理

すべての動詞由来複合語は、動詞の第一姉妹の位置に生ずる語を編入することによって作られる。

この原理は、動詞句と SC の内部構造が共に、動詞の下位範疇化の枠（動詞が VP 内でもとるべき義務的要素の指定）に従うという観察から導かれている。この原理は次のように働く。

- (6) She makes peace quickly.



(6)において、*peace* は義務的目的語であり、故に、動詞句においては第一姉妹の位置に生ずる語である。従って、第一姉妹の原理によれば、この *peace* が X 位置に編入されて複合語が形成される訳である。このことは、(6)に示されているように、第一姉妹を超える副詞 *quickly* の編入が阻止されることを意味している。実際、次のように、副詞編入を受けた SC は非文法的と判断される。

(7) a. peace-making

* b. quickly-making

Roepers-Siegel の提案は、-ing SC 形成をうまく説明しているようではあるが、次のような二つの問題が未解決のまま隠されていると考えられる。(1) ある種の SC には、範疇付与に制約があるにもかかわらず、そのことは生成の仕組みに反映されていない。(2) 第一姉妹の原理は動詞の下位範疇化のみに焦点を当てているので、V-ing の前の要素 X しか説明されない。

これら二つの問題点を実際のデータを使って見ていこう。まず(1)に関して、Roepers-Siegel の提案する接辞規則を考えてみる。-ing SC の場合、彼らの理論では、常に、範疇 N/A が次のような接辞規則により与えられる。

(8) -ing 接辞規則

[verb]… > [[empty]+verb+ing]_{N/Adj}

ところが、この規則は、副詞編入の SC の場合うまくいかない。

(9) a. [beautifully dancing]_A girl

b. [beautifully dancing]_{N*}

c. [ballad singing]_N

(9a)のみを見る限りでは、この規則は何ら問題がないようである。しかし、N/A の形で随意選択可能なはずの範疇 N が、*beautifully dancing* のような副詞編入の SC に与えられると、非文法的 SC が作りだされてしまう。残念なことに、彼らの提案する接辞規則は、このようなある種の範疇に特有な SC の振るまいを正しく反映していない。この欠陥は、彼らの理論が、-ing SC 形容詞と -ing SC 名詞の区分を原則的にとらえる手段を持っていないところから生まれるのではないだろうか。

次に第二の問題点、要素 Y について考えてみる。Roepers-Siegel は、結局のところ、Y については何も明確に述べていない。彼らが Y を主語項とみなしていたらしいことが示唆されるのみである。次のデータはこの推測を裏づけるものと思われる。

- (10) a. * It falls life.
 b. It supports life.
 c. It falls fast.
 d. * It supports fast.
- (11) a. * life-falling (snow)
 b. life-supporting (trees)
 c. fast-falling (snow)
 d. * fast-supporting (snow)

これらのデータは、文の容認可能性と SC の容認可能性が対応していることを示すために提示されたものだが、ここで指摘したいのは、(11)の容認可能性の判断が（ ）内に示された語に依存している点である。第一姉妹の原理は、動詞の下位範疇化の枠のみを対象として導きだされたものであるにもかかわらず、SC の文法性は VP の外側の主語に依存しているのである。

しかしながら、本当に、Y 位置には「主語」しか現われることがないのであろうか。次の例は、彼らの前提に反して、Y 位置に非主語項が現われ、しかも、完全に容認可能な例である。

- (12) a. gun shooting sportsland
 b. cherry viewing parties (Student Times, 1986)

(12)の Y 位置にある語が外項ではないことは次のデータが示す通りである。

- (13) a. * sportsland shoots gun
 b. * parties view cherry

従って、Y は必ずしも外項を担っていないとも言えよう。

しかし、一方、Y には全く制約がないかという点、そういう訳でもない。

- (14) a. * lightly stepping shoes
 b. * lightly stepping hall
 c. lightly stepping woman

Rooper-Siegel のモデルでは、ly-副詞編入の -ing SC は、少なくとも形容詞

としては適格であると思われたが、(14a)(14b)が示すように Y に置かれる語によっては、非文法的と判断されるようである。彼らの理論は、[X+V-ing] という単位に関しては十分説明力がある反面、対象とする単位を [X+V-ing+Y] に拡大すると、たちまち問題を露呈してくる。

2.2. Lieber の項結びつけの理論

次に、もう一つの代表的理論、Lieber (1983) を考察することにする。Lieber のこの研究は、Chomsky (1981) の「統率と束縛の理論」の枠における最初の SC 生成に関する理論である。そこでの提案は、Roepers-Siegel の提案にあるような複雑な諸規則を必要とせず、主要複合語と総合的複合語の両方を共通の項結びつけの原理 (Argument Linking Principle) と素性浸透の規約 (Feature Percolation Conventions) により説明しようとするものである。理論の簡潔さ、説明力の大きさの点から言えば、Lieber の理論の方が Roepers-Siegel の理論より優れていると言える。しかし、より広範な資料を説明できるということは、換言すれば、原理の適用条件がゆるいということであり、過剰な生成力を持つということにもなる。

まず、Lieber の理論を概観してみることにする。このモデルでは、動詞以外のすべての文要素は次の三つに分類される⁴⁾。

- (15) a. 内項 (internal argument) : 動詞を下位範疇化する義務的な語。
例えば、*give* は二つの内項を持つ。
- b. 意味項 (semantic argument) : 義務のないしは語彙的に指定された、内項ではない語。即ち、場所、道具、様態を表わす句、及び受益者、動作主。
- c. 外項 (external argument) : 動詞の項ではなく述語の項。

文の構成要素をこのように定義した上で、Lieber は編入される項がどんな項であり、生成される構造はいかなる範疇を担うかについて、その生成の

仕組みを次のように述べている（SC に関する部分のみを抜粋）。

(16) 素性浸透の規約（規約 IV）

語彙範疇や項構造のような個々の語の語彙情報は複合語形成において、最も右に位置する語幹あるいは接辞から浸透する⁵⁾。

(17) 項結びつけの原理

a. []_α[]_V の構造において、（この場合の α はすべての範疇にわたる）、V はすべての内項と結びつけられねばならない。

b. もし語幹 []_α が、項を取る語幹を含む複合語において自由であるならば、α は意味項として解釈されなければならない。

さて、ここで前述の Roeper-Siegel と Lieber の理論を比べてみると、Lieber の理論の方がいくつかの点で優れていることがわかる。例えば、生成されてくる SC の範疇決定が、Roeper-Siegel では接辞ごとの接辞規則に委ねられていたのに対し、Lieber では範疇素性も項構造に関する情報等と同様に、素性浸透の規約一つにより取り扱われるので、範疇の付与と項構造の付与の両方が可能である。

また、Roeper-Siegel のモデルでは、下位範疇化の枠が編入される際、義務項/随意項の区別が明確ではなく、生じる優先順位もあいまいであったが⁶⁾、Lieber のモデルでは、項構造という概念の導入により、義務項とそれ以外の随意的意味項との原則的区別が可能となっている⁷⁾。

しかしながら、この Lieber の理論も、ここで問題としている X+V-ing +Y の構造の分析においては、問題がないとは言えない。まず次の例を考えてみよう。

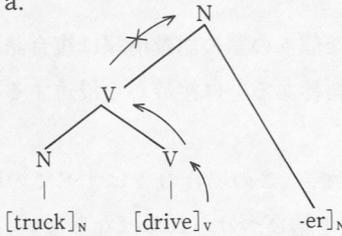
(18) a. truckdriver

b. truck driving man

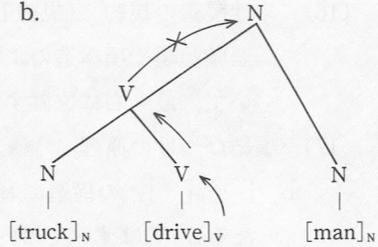
(18a)の接辞 -er と (18b)の *man* はそれぞれ *truck* を *drive* する「人」を指しており、項構造という観点から見れば、両者共に、主語項、即ち外項を担っていると考えられる。ところが、Lieber の浸透規約は、(19)に示すよ

うに、外項を *-er*、あるいは *man* に付与することができない。

(19) a.



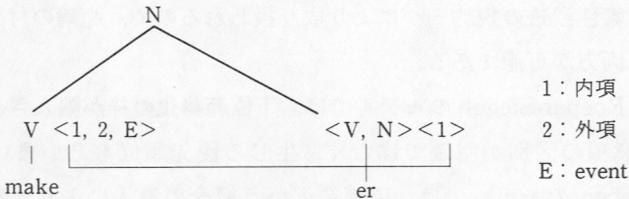
b.



なぜなら、Lieber のモデルでは、項構造を含む語彙素性は範疇の変更によって浸透を阻止されるからである。(19a)と(19b)においては、下から2番目の V 節点から最上部の N 節点への中で浸透は阻止される。

Sproat (1986) はこの外項付与の問題に代案を立てている。*-er* SC の分析にあたり、次のような構造を *-er* SC に付与し、接辞 *-er* を外項と固定している。

(20)



それに反し、Lieber は *-er* について次のような語彙エントリーを与えているにすぎない。

(21) *-er]*_v _____]_N

項構造： \varnothing

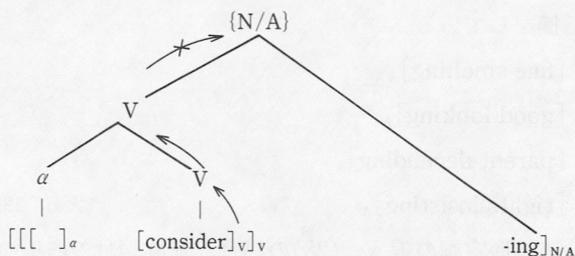
意味表示：agentive

このエントリーの中での意味表示 'agentive' が何を意味するかは不明である。

Lieber の理論のもう一つの問題は、範疇付与の仕組みにある。Lieber は、*-ing* SC 名詞と *-ing* SC 形容詞を、次のような構造において、同じ方法

で生成している。

(22)



ここに示されているように、N/A という範疇素性は接辞 -ing から最上部の節点に浸透し、 $[\alpha\text{-considering}]$ の範疇となる。この時、NあるいはAのいずれかが随意に選択される。

(23) a. a [proposal-considering]_A task-force

b. The [proposal considering]_N went on for a week.

(24) *a. a [quick-considering]_A task-force

*b. The [quick considering]_N went on for a week.

(23)(24)に関する限りでは、この範疇付与の仕組みはうまく機能しているように見える。この仕組みにおいては、形容詞として適格な SC は、名詞としても適格である。従って、 α の位置に入る語さえ項構造の要求を満たしていれば、範疇は N がつけられようと V がつけられようと、問題は起こらないはずである。

ところが、次のような例は、この仮定が必ずしもいつも正しいとは限らないことを示している。

(25) a. [lightly stepping]_{N*}

b. [lightly stepping]_A

(26) a. [easy going]_{N*}

b. [easy going]_A

これらの例は、-ing SC の生成に、品詞によって異なる制約が働いている可能性があることを示唆している。大石 (1988) は、次のような例を挙げて、

名詞を作る *-ing* と形容詞を作る *-ing* には異なる条件が働いているのではないかという指摘をしている。

(27) a. [fine-smelling]_A

b. [good-looking]_A

(28) a. [parent-depending]_A

b. [rights-insisting]_A

(大石, 1988, p.125)

(27)の場合、述語形容詞の編入、(28)の場合、前置詞付の内項の編入という違いはあるものの、この両方の型の SC は通例形容詞として用いられ、名詞としては用いられないと述べている。

この SC の範疇の特定性に関する問題を、Lieber はどのようにその生成理論の中で取り扱っているのであろうか。

(29) a. *-ing*]_v____]_A

意味表示：分詞的形容詞 (Participial Adjective)

b. *-ing*]_v____]_N

意味表示：動名詞的名詞 (Gerundive Nominal)

(29a)(29b)は、A と N を区別するために提示された唯一の表示である。ここでは、「動名詞的」という名称も「分詞的」という名称も、何ら統語的意味を持っていない。この表示だけでは、*-ing* が二つの範疇 A, N を与えることができるという以上のことは示されず、従って、(25)(26)に例示したような範疇に特有の適格性は説明されない。(25a)(26a)共に、項結びつけの原則には違犯しておらず、違いは単に SC の受けとる範疇だけであり、その非文法性は、範疇付付に関する妥当な理論によって説明されなければならないだろう。そこで次節において、範疇問題と外項の取り扱いに焦点をあて、Lieber らの理論の代案を提出したい。

3.1. -Ing SC 再考

最初に、先行研究の検討の結果明らかになったのは次の2点であることを確認する。

- (1) [X+V-ing] の後ろの要素 Y の担う項構造は X+V-ing+Y の適格性に影響を与える。
- (2) [X+V-ing] の範疇、名詞/形容詞は、X+V-ing+Y の適格性に影響を与える。

そこで、X+V-ing+Y における [X+V-ing] には二つの可能性——-ing SC 名詞と -ing SC 形容詞があると仮定し、Y への項構造付与の観点から、問題の構造の分析を進めることにする。

3.2. -Ing SC 形容詞

まず、補部 X を編入しない自動詞由来の V-ing+Y の例を調べてみる。

- (30) a. a departing visitor
b. the continuing movement
c. the oldest living German conductor

(Student Times, 1986, 1987)

(30)で V-ing の後ろの位置に現われている要素の特質はいかにしてとらえることができるのであろうか。これらの要素の共通性は何であらうか。

考えられる一つの方法は、その担っている意味役割を調べてみることである。

- (31) a. a departing visitor (動作主, あるいは主題)⁸⁾
b. the continuing movement (主題)
c. the oldest living German conductor (動作主, あるいは主題)

(31)において下線の引かれている語が、どんな意味役割を担っているかについては、研究者によって意見が異なるかもしれないが、少なくとも能格動詞の場合は、Yの担う項は明らかであると言える。

Keyser-Roeper (1984)によれば⁹⁾、能格自動詞の主語は、自動詞から他動詞を派生する語彙変形規則によって、能格他動詞の目的語と結びつけられている。この仮説の上にたつと、(32a)(32b)にあるように、能格自動詞由来のSC—the *rolling ball* のY位置にある語と、能格他動詞由来のSC—the *ball rolling man* のX位置にある語の意味役割は、等しくなければならない。

- (32) a. the rolling ball (主題)
b. the ball rolling man (主題)

従って、(32b)の‘*man*’には主題以外の意味役割——動作主——が付与されなければならない。つまり、(32a)のY位置には主題、(32b)の同じ位置には動作主が付与される。この分析から、Y位置を主題関係によって説明することには無理があることがわかる。

そこで、次に、動詞の文法関係という視点から、この問題をとらえ直してみることにする。Y位置に対する文法関係として、第一に浮ぶのは主語項である。このことは、(31)に対応する次のような文を想定すれば明らかである。

- (33) a. *a visitor departed*
b. *the movement continued*
c. *the oldest German conductor lives*

当然のことながら、非主語項が、これらの自動詞の-ing形とV-ing+Yの構造に現われると、予測通り非文法的として排除される¹⁰⁾。

- (34) * a. *a departing house*
* b. *a house departs*
(35) * a'. *the living food*

* b'. the food lives

この Y 位置と主語を関係づける主張は、Keyser-Roeper の -er SC の分析においてもなされている¹¹⁾。その分析においては、Lieber が 'agentive' という意味表示のみによりとらえていた接辞 -er を、主語項という見方でとらえ直している。なぜなら接辞 -er は、動作主のみならず、主題、道具、等の意味役割を担っているからだ。

- (36) *hitter* (動作主), *sticker* (主題), *weeder* (道具)
pusher (動作主), *sleeper* (主題), *trimmer* (道具)

(Keyser & Roeper, 1984)

これらの -er SC の観察から明らかのように、動詞の後ろの Y 位置は、意味役割によって特徴づけられるのではなく、「主語」即ち「外項」という動詞と項との文法関係において、より適切にとらえられる。

最後に、この主張を支持すると思われる副詞編入の -ing SC の例を考えてみることにする。Lieber によれば、自動詞は内項を持たないために X 位置に制約がない。それ故、意味項としての副詞編入が可能なはずである。しかしながら、副詞編入を受けた複合語でも、Y 位置に共起する語によっては非文法的となってしまう。

- (37) a. *lightly stepping woman* (動作主)
* b. *lightly stepping shoes* (道具)
* c. *lightly stepping hall* (場所)

(37a)(37b)(37c)はすべて同じ *lightly stepping* を含んでいるにもかかわらず、適格なのは動作主を表わす *woman* を持つ(37a)のみである。では Y 位置に許されるのは、動作主のみなのであろうか。次の例は、能格動詞由来の -ing SC の例である。

- (38) a. the fast growing corn (主題)
* b. fast growing fertilizer (道具)
* c. fast growing season (場所)

これらの例では、主題を示す語を持つ(38a)だけが適格とされている。(37)(38)のデータから、Y位置に課せられている制約は、主題関係によっては説明されないことがわかる。では(37a)と(38a)の適格性を共通に説明するものは何であろうか。それは、やはり、Y位置に付与される文法関係である。以上の自動詞由来の-ing SC に関するデータはすべてY位置と主語即ち外項との関係を保障するものであったと考えられる。

次に [X+V-ing] への範疇付与の問題について考えてみる。ここで扱った副詞編入の-ing SC は、2節でみたように名詞の範疇を付与されると非文法的と判断される¹²⁾。

(39) * a. Quickly cooking is nice.

* b. Slowly driving is nice.

それ故、Y位置に外項をとり、かつ [X+V-ing] に形容詞の範疇付与を要求する-ing SCの類に対し、次のような一般化を暫定的に与えることにする。

(40) a. [X+V-ing+Y] の内部構造は [[X+V-ing]_A[Y]_N] である。

b. [[X+V-ing]_A[Y]_N] は、Yに外項が与えられ、Xに内項が与えられるならば、その時のみ適格である。

但し、動詞が内項を持たない場合は、Xに意味項が与えられてもよい。

3.3. -Ing SC 名詞

3.2.節では外項を要求する-ing SCを観察し、それらに-ing SC形容詞として一般化を与えた訳だが、ここでは擬似自動詞由来の-ing SCのデータを根拠に X+V-ing+Y のもう一つの基底構造の可能性を探ることにする。まず次の例における *make* と *read* の振るまいを見てみよう。

(41) a. Mary is making a cake.

* b. Mary is making.

(42) a. The children are reading books.

b. The children are reading.

動詞 *read* は Lees (1960, p.11) により擬似自動詞と定義される動詞である。この動詞の特徴は削除可能目的語を持っていることである。(42a)では他動詞のように振るまい、(42b)では自動詞のように振るまうのは、この仮説から説明される。一方、*make* は純粹に他動詞であるため、目的語の削除が許されない。Lehrer (1970) によれば、*read* のような動詞は、語彙目録に削除可能目的語に関する情報を持っており、それ故、解釈において削除された語を唯一的に復元できるとされている¹³⁾。

-Ing SC の生成にあたり、もし Lehrer のこの仮説を受け入れるとすると、擬似自動詞由来 SC において、目的語、即ち内項が削除可能であることが予測される。

(43) a. book reading lamp

b. reading lamp

(44) a. letter writing paper

b. writing paper

(45) a. cake making tool

* b. making tool

これらの例は、この予測が正しいものであることを示している。これらの例を見る限りでは、擬似自動詞の目的語削除の特徴は、文レベルにおいてと同様、-ing SC においても平行して現われるように思われる。しかしながら、次の例は、この特徴が必ずしもすべての -ing SC 生成に現われないことを示している。

(46) a. book reading children

b. * reading children

(47) a. letter writing man

b. * writing man

(46a)と(46b), 及び(47a)と(47b)との文法性の差はどこから生まれるのであろうか。(44)(45)の例で削除可能であった目的語は, なぜ(46b)(47b)において削除できないのであろうか。その理由は, (44a)の *letter writing paper* と(47a)の *letter writing man* が, 一見同じ構造 X+V-ing+Y を持っているが, その基底構造は異なっているということではないだろうか。

この疑問を解く一つの鍵は V-ing の後ろに置かれている語にあると言える。V-ing の後ろの要素 Y は, 項構造という観点から見ると, (44a) *letter writing paper* と(47a) *letter writing man* では違いがある。このことは, 次のようなテストにより確かめられる。

(48) a. man writes a letter

b. * paper writes a letter

(49) a. * man for writing a letter

b. paper for writing a letter

(48)(49)の結果は, *man* が外項を, また *letter* が意味項を担うことを明らかにしている。従って, この項の違いが, 擬似自動詞由来の X+V-ing+Y の構造における X 位置の内項の削除可能性に, 影響を与えていると考えられる。

この擬似自動詞の内項の削除可能性は, X+V-ing+Y に対する二つの基底構造の存在を動機づけると考える。更に, この主張は, 前の節で主張した [X+V-ing]+[外項] という構造以外に, [X+V-ing]+[意味項] という構造が, X+V-ing+Y にはあることを示唆する。前節では, [X+V-ing][外項] という内部構造が, X 位置への副詞の編入という現象によって検証されたのに対し, ここでは, [X+V-ing][意味項] という新たな内部構造が, X 位置での擬似自動詞の目的語の削除可能性を通して検証された訳である。

しかし, ここで次の問題に直面する。前節では, 外項と共に [X+V-ing] には形容詞が付与されるべきだという議論をしたが, では, 新たに提案された [X+V-ing][意味項] という構造の場合, [X+V-ing] にはい

かなる範疇が付与されるべきなのであろうか。

ここでは、暫定的に、接辞 *-ing* の付与できるもう一つの範疇ということで、意味項と共起する $X+V\text{-ing}$ に名詞の表示を与えることにする。名詞の範疇付与を動機づける議論は、次の節でおこなうことにして、仮に、次のような一般化を、この節で議論した構造に与える。

(50) a. $[X+V\text{-ing}+Y]$ は二つの異なる内部構造を持つ：

$[[X+V\text{-ing}]_A[Y]_N]$ と $[[X+V\text{-ing}]_N[Y]_N]$

b. $[[X+V\text{-ing}]_N[Y]_N]$ は、 Y に意味項が与えられ、 X に内項が与えられるならば、その時にのみ適格である。但し、動詞が内項を持たない場合は、 X に意味項が与えられてもよい。

3.4. 範疇問題

Roeper-Siegel (1973), 及び Lieber (1983) においては、 Y がどんな項であれ、 Y が存在していること自体が、 $[X+V\text{-ing}]_A$ の暗黙の条件になっている。しかし、今、 Y に外項を持つ構造とは異なる $[X+V\text{-ing}]$ [意味項] というもう一つの基底構造が明らかにされた訳であるから、形容詞以外の範疇の可能性を考えてみるのは、自然な推論ではないだろうか。そこで、接辞 *-ing* が付与することのできるもう一つの範疇、名詞の可能性を探ってみることにする。

しかしながら、先行研究において、 Y の存在する構造の場合、なぜ一定に $X+V\text{-ing}$ に形容詞を付与したのか、その理由を今一度考えてみる必要がある。推測できる理由の一つに、名詞+名詞の連鎖が、統語部門においては作りだせないということがある。だが、実際は、名詞+名詞の連鎖を作りだすことは可能なのだ。但し、この連鎖を作りだせるのは、統語部門ではなく、語彙部門である。 $X+V\text{-ing}+Y$ を $[[X+V\text{-ing}]_N[Y]_N]_N$ という NN 型の複合語とみなせば、 $X+V\text{-ing}$ に名詞を付与することは可能である。

ここで、 $[[X+V\text{-ing}]_N[Y]_N]_N$ の生成にあたって $[X+V\text{-ing}]$ 自体の複合化が先行することに注意してほしい。なぜなら、 $X+V\text{-ing}+Y$ を $[X+V\text{-ing}]_N$ と $[Y]_N$ の複合と見ることは、複合化規則が循環的に2回適用されたことを意味するからだ。この推論は、 $[[X+V\text{-ing}]_N[Y]_N]$ の構造全体が語彙部門で作られるという仮説を導く¹⁴⁾。

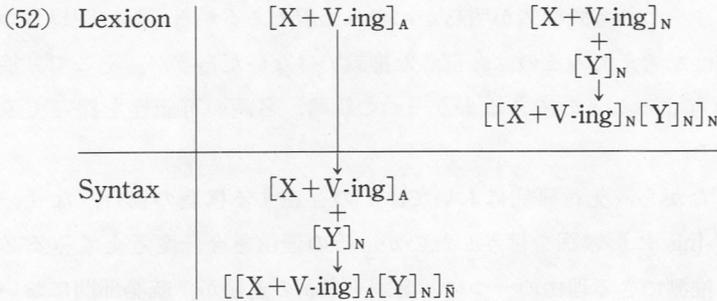
その一方、3.2.節で主張した $[X+V\text{-ing}]_A[Y]_N$ の構造は、語彙部門の出力である複合語 $[X+V\text{-ing}]_A$ と名詞 $[Y]_N$ とが統語部門において結合して作られると考えられる。言うまでもなく、これは、形容詞と名詞の連鎖が統語部門で可能なためである。

表層構造は同じ $X+V\text{-ing}+Y$ であっても、これらの仮定の上にとつと、一方は語彙部門で作られ、他方は統語部門で作られるということになる。言い換えれば、一方は語として、他方は句として作られることになる。以上の議論は次のように要約される。

(51) $[X+V\text{-ing}]_N[\text{意味項}]_N$ は語である。

$[X+V\text{-ing}]_A[\text{外項}]_N$ は句である。

これらの生成の過程は、概略次のようになるのではないだろうか。



さて次に、この仮説(51)を実際のデータにより検証してみよう。まず句と語を識別する基本的統語テストを実行し¹⁵⁾、それから、そのテスト結果を用いて、ここで問題となっている $[X+V\text{-ing}]$ の範疇認定を試みる。

Scalise (1984, p.93) によれば、「複合語」の構成要素は、統語的操作に関

して独立した要素として機能することはできない。それに対し、「句」は独立した要素として機能することができる。Allen (1978, p.113) は、次のようなテストにより、複合語と句の識別を試みている。

(53) a. They picked black and blue pencils.

b. * They picked black and blueberries.

(54) a. John bought a very green house.

b. * John bought a very greenhouse.

(53)(54)にあるように、複合語は全体で一つの語として統語上機能しているので、'and' によってその一部を結合したり、'very' によってその一部を修飾したりすることができない。その一方、句は、各構成素が統語上独立しているので、これらのテストでは肯定的結果を得る。

そこで、このテストを、(51)に述べた仮説——[[X+V-ing]_A[外項]_N]は句であり、[[X+V-ing]_N[意味項]_N]_Nは語である——の検証に用いることにする。

まず、'very' のテストの結果を見てみよう。

(55) a. * the very Tango dancing music

b. ? the very far seeing hunter

c. ? the very fast growing corn

(55a)と(55b)(55c)の文法性を比べると、不明確ではあるものの、(55a)よりも(55b)(55c)の方が文法性は高い。従って、この結果から、名詞編入の *tango dancing* は、形容詞としての独立性を失ない、*tango dancing music* は全体で一つの語となっていると考えられる。それに対し、副詞編入の *far seeing hunter*, *fast growing corn* では、*very* による修飾が可能であるため、*far seeing*, *fast growing* はそれぞれ独立の構成素を成し、全体では一つの句となっていることが推測される。

次に 'and' による等位テストを試みる。

(56) a. * a stone throwing and childish device

b.? a stone throwing and childish man

(57) a.* a tango dancing and beautiful music

b.? a tango dancing and beautiful girl

このテストにおいて、被修飾語に意味項を持つ(56a)と(57a)は、非文法的と判断され、被修飾語に外項を持つ(56b)と(57b)は、不確かさは残すものの、等位接続が可能であり、非文法的であると判断されない。この結果から、(56b)と(57b)の *-ing* SC は独立した単位を成す形容詞であり、一方(56a)と(57a)の *-ing* SC は、形容詞との等位接続が不可能であることから、*X+V-ing+Y* 全体で一つの単位をなす複合名詞を構成していることが推測される。

これらのテスト結果から、(母国語話者の文法性の判断にはばらつきがあるものの¹⁶⁾) 少なくとも、次の3点は確認できたと言える：第一に、(55)のテストから、*Y* 位置に意味項が現われる場合、 $[X+V-ing]$ は 'very' による修飾が受けられないことが明らかなので、名詞であること。第二に、(56)(57)のテストから、*Y* 位置に外項が現われる場合、 $[X+V-ing]$ は普通の形容詞との等位接続が可能なので、形容詞であること。第三に、 $[X+V-ing]$ [意味項] の構造は、全体として「語」であり、 $[X+V-ing]$ [外項] の構造は、全体として「句」であること。つまり、これらのテストにより、 $[X+V-ing]$ の品詞は何であるのか、また、 $[X+V-ing+Y]$ はいかなる単位であるのか——「語」なのか「句」なのか——といった問題に答えが出されたと言える。

最後に、この節で明らかにされた、*X+V-ing+Y* の二つの基底構造に関する一般化を以下に述べる。

(58) a. $[X+V-ing+Y]$ は次の二つの異なる基底構造を持つ。

(1) $[[X+V-ing]_A[Y]_N]_N$ は *Y* に外項が与えられる時、適格である。

(2) $[[X+V-ing]_N[Y]_N]_N$ は *Y* に意味項が与えられる時、適

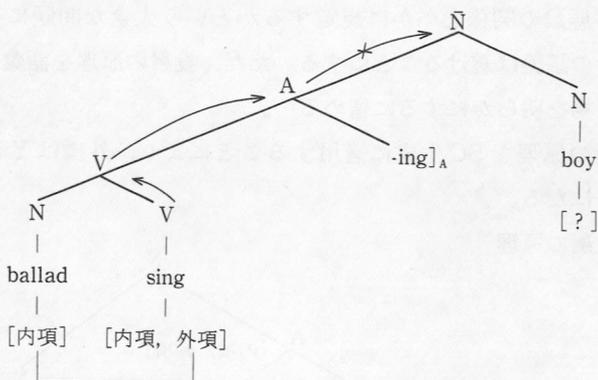
格である。

4.1. 派生の仕組み——投射の原理

この節では、3節で検証した二つの基底構造を派生する仕組みを提案する。まず、この二つの基底構造を派生する際に、Lieber モデルであれば、どんな問題点が現われるかを示す。

3節で議論した通り、この二つの基底構造を識別するのは、Y位置に付与される外項の存在である。ところが、Lieber モデルでは、この外項の付与が不可能である。その理由は二つある。一つは、異なる範疇を超えて項構造を浸透させることが禁じられているからである¹⁷⁾。

(59) Lieber モデル



(59)に示されているように、項構造の浸透は、範疇をVからAに変更する接辞 -ing に阻まれてしまう。ballad と sing の結合に -ing が付加された時点で、その支配節点はAに変わり、Vの持っている項構造はそこで止められ、それより上の節点へは浸透していくことができない。その結果、外項を担っていることが意味的には明らかな boy に外項を付与することができなくなる。

Lieber モデルで外項の付与ができないもう一つの理由は、外項自体が、浸透すべき項構造と考えられていないことにある。これは、研究者のとり立場により異なると言える。しかし、ここでは、文の生成のみならず SC の生成においても、内項と外項の両方を投射する立場をとることにする。

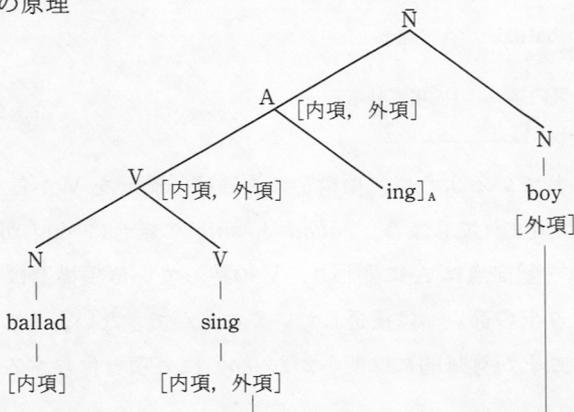
そこで、外項を含む項構造の全体を投射することのできる投射の原理を、Lieber 理論の代案として採用することにする。投射の原理は、Chomsky (1981), Sproat (1986) によって提案されているが、概略次のように述べられる。

(60) 投射の原理：項構造は、派生のすべての統語レベルにおいて、保持されねばならない。

これは、項構造に関する語彙特性が、派生の各段階で満たされねばならないことを述べたものである。ここで言う「統語レベル」を SC 生成の仕組みの中に認めるか否かは、外項を項構造の一部と認めるか否かの問題とからみ、統語論と形態論の関係をいかに規定するかという大きな問題に発展するので、ここでの議論は避けることにする。ただ、投射の原理を語彙部門に認めるという立場を明らかにするに留める¹⁸⁾。

この投射の原理を SC 生成に適用することにより、外項は Y 位置に付与されることになる。

(61) 投射の原理



(61)に示される通り，*sing* の項構造は範疇の変更には阻まれることなく，最上部の節点 \bar{N} まで投射される。これにより，*boy* は外項を受け取ることができる。

この仕組みは，一見うまく働くように見えるが，問題はある。この仕組みでは，外項は接辞 *-ing* に阻止されることなく Y 位置に付与されるという利点を持つ一方で，どんな語が Y 位置にあっても，それに外項を付与してしまう危険性がある。例えば，*trout fishing man* の *man* にも，また，*trout fishing river* の *river* にも同じように外項が付与されてしまうことになる。前者の外項付与は望ましい結果であるが，後者の場合は問題である（**river fishes trout*）。

こうした問題は，項構造の投射に際して，何も制約がないために起こるのではないだろうか。そこで，次に，項構造の投射の制約について考えてみる。

4.2. 派生の制約

—Participial-Ing と Gerundive-Ing

Lieber は一つの接辞 *-ing* に，すべての項構造の投射を阻止させてしまったが，ここでは，投射に関して異なった振るまいをする二つの種類の *-ing* があることを提案する。この二つの *-ing* を P-*ing*（分詞的 *-ing*）と G-*ing*（動名詞的 *-ing*）と呼ぶことにする。最近の生成形態論の SC 研究においては，この二つの接辞は，それぞれの与える範疇こそ形容詞，名詞と異なってはいるものの，項構造の投射に関しては同じ扱いを受けている。しかし，本論では，P-*ing* と G-*ing* は，範疇付与の面からばかりでなく，項構造の投射の面からも，別々の二つの接辞として扱われることを提案するものである。従って，次のような定義を与えることにする。

(62) P-*ing*：項構造は，形容詞を付与する P-*ing* を超えて投射されう

る；外項は実現される。

G-ing：項構造は，名詞を付与する G-ing を超えて投射されることはない；外項は実現されない。

しかしながら，これで派生に関するすべての問題が解決された訳ではない。G-ing 付加の場合，G-ing を超える浸透を阻止された外項はどうなるのであろうか。一つの推測は，この外項が，たとえ表層に実現されなくても，深層に存在するというものである。この場合，この外項は「潜在項」(implicit argument) となり，たとえ統語的には機能しなくても，意味解釈には参加すると考えられる¹⁹⁾。なぜなら，項構造に関わる語彙情報は，派生の過程において保たれなければならないからである。例えば，*trout fishing reel* に外項は現われていないが，「『誰か』が魚釣りに使うリール」を意味する。

この G-ing SC に動機づけられる潜在項は，一見，*ad hoc* な印象を与えるかもしれないが，外項の潜在化を考慮しないと説明できない例がある。

- (63) a. *trout fishing reel*
- b. *sinking boat*

(63a)において，動詞 *fish* は *reel* を使う主語即ち外項の存在を解釈上要求するが，(63b)の動詞 *sink* の主語は *boat* 以外に考えられない。(63b)に「誰かが沈む時に使う船」という解釈を与えることは奇妙である。

次に，P-ing と G-ing は *-ing* SC の生成を説明するために提案したものが，文のレベルでも有効であることを示す。G-ing に特徴的な潜在項は，ある種の構造を識別する手がかりを与えてくれる。例えば，次の(64)に挙げた2種類の構文は，さまざまな根拠に基づいて区別されるが，(62)に提示した P-ing と G-ing の定義からも，その違いは説明される。(64a)(64b)は動名詞付対格，(64c)(64d)は分詞付対格として知られる構文である。

- (64) a. *Mother hates us eating too much.*
- b. *Father objected us using his car.*
- c. *He saw the thief running away.*

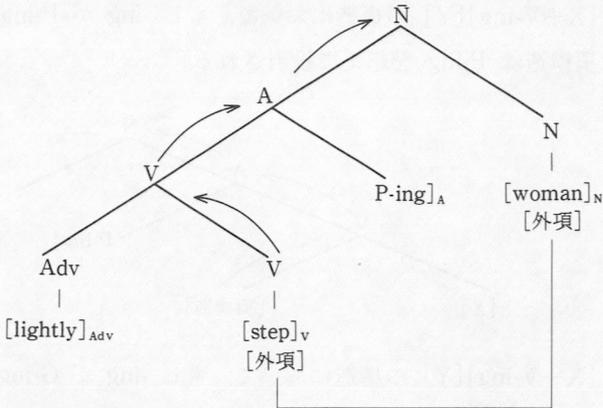
- d. I listened to the band playing in the park.
- (65) a. Mother hates eating too fast.
 b. Father objected to using his car.
 c. * He saw running away.
 d. * I listened to playing in the park.

G-ing に対する本論での提案——G-ing は外項の実現を要求しない——は、(65a)と(65b)が文法的であることを、正しく予測する。一方、P-ing に対する提案——P-ing は外項の実現を要求する——は、外項が実現されていない(65c)(65d)が、非文法的であることを正しく予測する。更に、(65a)と(65b)において、外項は実現されていないが、意味解釈には参加すると考えられる。例えば、(65a)は「母は、『誰であれ』食べ方が早すぎるのを嫌う」という解釈を得る。

4.3. 投射の原理（修正案）

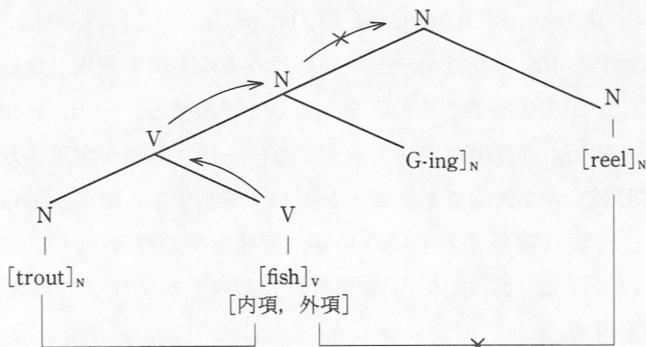
最後に、P-ing と G-ing について提示した一般化が、投射の原理とどう関わるのかについて述べることにする。

(66)



副詞編入の -ing SC における *woman* は、外項を付与されなくてはならないが、このことは、前節で提案した P-ing の一般化により保証される。(66)に示されている通り、項構造が、最上部の \bar{N} 節点まで投射されるからである。

(67)

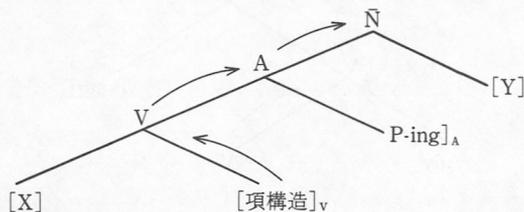


(67)では、*reel* は *fish* をする主語ではなくて道具を表わす意味項である。このことは、項構造の投射を阻止する G-ing の存在により、保証される。

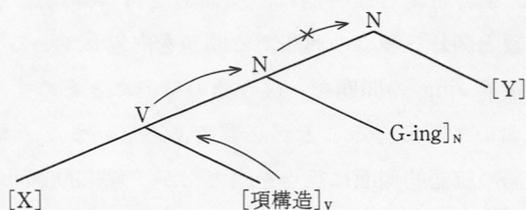
ここで、本論のまとめとして、-ing SC 生成に関する投射の原理の修正案を提出する。

(68) 投射の原理 (修正案)

- a. $[X+V-ing][Y]$ の構造において、もし -ing が P-ing であれば、項構造は P-ing を超えて投射される。



- b. $[X+V-ing][Y]$ の構造において、もし -ing が G-ing であれば、項構造の投射は阻止される。



5. まとめ、及び今後の課題

本稿では、総合複合語の分析を、従来の $X+V\text{-ing}$ から3語の $X+V\text{-ing}+Y$ に拡大し、 $V\text{-ing}$ の右側の要素 Y が $X+V\text{-ing}+Y$ 全体の文法性決定に関与する事実を示した。そして、その文法性の決定においては、 Y の担う項構造が鍵となることを明らかにし、この要素 Y の分析を通して、 $X+V\text{-ing}+Y$ が二つの基底構造—— $[[X+V\text{-ing}]_A[Y]_N]_N$ と $[[X+V\text{-ing}]_N[Y]_N]_N$ ——を持つあいまいな構造であることを主張した。更に、この二つの構造を派生する仕組みを、投射の原理の修正により提案した。その過程で、この二つの基底構造の違いと、その生成の仕組みを説明するものとして、二つの性格の異なる -ing 形—— $P\text{-ing}$ と $G\text{-ing}$ ——の存在を明らかにした。

このように、一つの形態を持つ接辞でありながら、項構造の実現に関して異なった振るまいを見せる接辞は他にもある。例えば、接辞 -tion にも、 -ing と同じく項構造の投射に関して異なる要求をする二つの型があることを、Sproat (1986) は指摘している。

- (69) a. This construction is ugly.
 b. John's construction of a polyhedral model of himself surprised even Mary.

(Sproat, 1986)

-Ing SC を含む総合複合語は、項構造を持つ動詞をその核に持つことから、統語論と関わる多くの興味ある問題を内包しているように思われる。それゆえ、接辞 -ing の問題を、複合語の枠内にとどめず、名詞句、更に文のレベルにおいてとらえることが必要であろう。また、本稿では、主に -ing 総合複合語の統語的側面に焦点を当てたが、意味的側面の研究も進められるべきであろう。統語部門と語彙部門の接点にたつ総合複合語には、まだ多くの課題が残されている。

〔註〕

* 本稿は、筆者の修士論文 A Study of Nominal and Adjectival Compounds: With Special Reference to -Ing の抜粋に一部の修正をし、加筆をしたものである。

1) Lieber (1983) は複合語を2種類に分類している。一つは主要部が動詞から由来していない *doghouse*, *pickpocket* のような語であり、これらは Primary Compound (主要複合語) と呼ばれる。もう一つは主要部が動詞由来であり、かつ -ing, -ed, -er という接辞を取る *housekeeping*, *handwritten*, *truckdriver* のような語であり、これらは Synthetic Compound (総合的複合語) と呼ばれる。

Rochelle Lieber, "Argument Linking and Compounds in English," *Linguistic Inquiry*, 14, 1983, pp. 251-285.

2) 外項の定義に関しては、さまざまなものがあるが、ここでは「主語」という文法機能を表わすために「外項」を用いる。外項に関する詳しい議論については、以下の文献を参照のこと。

Nigel, A. J. Fabb, "Syntactic Affixation," Diss. MIT, 1984, pp. 113-117.

3) Roeper-Siegel は、ここで SC (総合複合語) と呼んでいるものを、動詞由来複合語 (Deverbal compound) と呼び、それ以外の複合語をすべて語根複合語 (Root Compound) と呼んでいる。

4) Lieber はこれらの項の他に、次のような項を規定している。

自由 (free): 語幹は、項をとる語彙項目に連結されないで残ると自由である。

5) この考え方は、いろいろな点で問題がある。確かに、英語においては、ほとんどの接辞は右側に付加されるが、一部の接頭辞、例えば 'en' は左側に付加され、語の範疇を変更する ([*courage*]_N→[*encourage*]_V)。また、接頭辞 're' は付加される動詞の項構造を変更することがある。

6) Roeper-Siegel のモデルでは、SCに編入される θ -役割の優先順序は、次のように提案されている。

(i) 動詞 [直接目的語] [副詞] [道具] [動作主] [場所] etc.

しかしこの順序づけは多くの問題を含んでいる。大石（1988）は随意的要素の編入順序に問題を投げかけ、次のような例を反例として提示している。

- (ii) made (by hand) (by Indians)
 - a. handmade by Indians
 - b. *Indian-made by hand
 - c. handmade
 - d. Indian-made

大石 強『形態論』現代の英語学シリーズ、第4巻、開拓社、1988年、p.120。

- 7) 義務項か随意項かの区別は、いろいろ困難な問題を含んでいるが、その中の一つは「主語」の取り扱いをめぐる問題である。

- (i) (the enemy's) destruction of the city.

この例における、'the enemy's' は *destruction* の意味上の主語である一方、名詞句における随意項である。主語は、項構造の一つの項である以上、文においては義務項であるにもかかわらず、(i)では随意項となっている。Grimshaw (1988) は、このような項の性格と付加詞の性格の両方を持つ要素を項付加詞 (argument adjunct) と定義し、議論をしている。

Jane Grimshaw, "Adjuncts and Argument Structure," Mineo. Brandeis University, 1988.

- 8) 'depart' は、外項を担っていないと思われる語とでも複合化できるようである。

- (i) departing visitor
- (ii) departing bell, departing platform

(i)と異なり(ii)では、*depart* の項構造は、生成の際に全く継承されていない。この現象には2通りの説明が可能であろう。一つは、主題関係からの説明である。(i)の *visitor* は主題であるため実現されなければならないが、(ii)の隠されている外項は動作主であるため抑止 (suppress) されてもよいというものである。

もう一つは、接辞 *-ing* の特性による説明であり、本稿でとっている立場である。即ち、動詞の種類とは無関係に、付加される接辞により項構造の実現が要求されるというものである。しかしながら、この点の考察はここでは十分とは言えず、動詞の種類と項構造の実現要求との関係は、更に分析を深めねばならない点だと思われる。

- 9) 能格動詞の定義は、Keyser-Roepel (1984) の定義に従う。

- (i) a. The sun melted the ice. (能格他動詞)
- b. The ice melted. (能格自動詞)

Samuel J. Keyser and Thomas Roepel, "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry*, 15 (1984), pp. 381-416.

- 10) 非主語項が、主要部に現われている例もある (i a)(i b)。これは、本稿での主張——V-ing の後ろの語は [主語項] と [非主語項] の両方の可能性がある——を、V-ing+Y の構造で裏づけることになると思われる。

Adams (1973, p. 66) は、主語が現われる型の複合語と非主語の現われる型の複合語とでは、アクセントの型が異なるという指摘をしている。

- (i) a. chéwíng-gum b. tálkíng-point
(ii) a. fólđíng dóór b. revólvíng dóór

Adams, Valerie, *An Introduction to Modern English Word-Formation*, (London: Longman Group Ltd., 1973).

- 11) Keyser and Roeper (ibid.), p. 395.
12) 外項と副詞の共起関係は、文レベルでも観察される。次のデータは Milsark (1972) によるものである。

- (i) a. The police are stopping *public* drinking on campus.
b. *The police are stopping drinking *publicly* on campus.
(ii) a. *Going to concerts *frequently* was started by John.
b. *John was starting going to concert *frequently*.

'drinking' 'going' の外項が現われていない (i b)(ii b) は、副詞が共起すると非文になる。

Gary Milsark, "Re: Doubl-ing," *Linguistic Inquiry*, 3 (1972), pp. 542-549.

- 13) 削除可能目的語について詳しくは、下記の文献を参照のこと。
Adrienne Lehrer, "Verbs and Deletable Objects," *Lingua*, 25 (1970), pp. 227-253.

- 14) Lieber らは、SC が語彙部門で生成されると考えているが、それに反対の立場をとる研究者もいる。Fabb (1984), Sproat (1985) は SC が統語論の枠内で生成されると考えている。しかし、本稿では、語彙部門で生成されるという立場をとる。なぜなら、統語部門で生成されるとすると、語彙化された意味を付与する場所がないからである。基本的に、SC は合成的意味と語彙化された意味の両方を持ちうると考えられるので、語彙部門で生成されて後に、これらの意味を与えられ、語彙目録にリストされると考える方が妥当ではないだろうか。

Nigel A. J. Fabb, (ibid.).

Richard Sproat, "On Deriving the Lexicon," Diss. MIT (1985).

- 15) 句と語の識別については、いろいろな方策が試みられてはいるが、現実には困難だとする見方が強い。この問題については下記の文献を参照のこと。

Adams (ibid.), pp. 57-60, 90-91.

Judith N. Levi, *The Syntax and Semantics of Complex Nominals* (New York:

- Allen, Margaret R. "The Morphological Investigations." Diss. University of Connecticut. 1978.
- Botha, Rudolf P. *Morphological Mechanisms*. Oxford: Pergamon Press, 1984.
- Chomsky, Noam. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA.: The MIT Press, 1965.
- . *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications, 1981.
- Fabb, Nigel A. J. "Syntactic Affixation." Diss. MIT. 1984.
- Grimshaw, Jane. "Adjuncts and Argument Structure." Mimeo. Brandeis University. 1988.
- Keyser, Samuel J. and Roeper, Thomas. "On the Middle and Ergative Constructions in English." *Linguistic Inquiry*, 15 (1984), 381-416.
- Lees, Robert B. *The Grammar of English Nominalizations*. The Hague: Mouton, 1960.
- Lehrer, Adrienne. "Verbs and Deletable Objects." *Lingua*, 25 (1970), 227-253.
- Levi, Judith N. *The Syntax and Semantics of Complex Nominals*. London: Academic Press, Inc., 1978.
- Lieber, Rochelle. "Argument Linking and Compounds in English." *Linguistic Inquiry*, 14 (1983), 251-285.
- Lyons, John. *Semantics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1977. Vol. II.
- Milsark, Gary. "Re: Doubl-ing." *Linguistic Inquiry*, 3 (1972), 542-549.
- 大石 強『形態論』現代の英語学シリーズ, 第4巻, 開拓社, 1988年。
- Quirk, Randolph, et al. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman Group Ltd., 1972.
- Roeper, Thomas. and Siegel, Muffy E. A. "A Lexical Transformation for Verbal Compounds." *Linguistic Inquiry*, 9 (1978), 199-260.
- Roeper, Thomas. "Implicit Arguments, Implicit Roles, and Subject/Object Asymmetry in Morphological Rules." Mimeo. University of Massachusetts. 1986.
- . "Implicit Arguments and the Head-Complement Relation." *Linguistic Inquiry*, 18 (1987), 267-310.
- Scalise, Sergio. *Generative Morphology*. Dordrecht: Foris Publications, 1984.
- Selkirk, Elisabeth O. *The Syntax of Words*. Cambridge, MA.: The MIT Press, 1982.
- Sproat, Richard. On Deriving the Lexicon. Diss. MIT. 1985.

- . “The Projection Principle and the Syntax of Synthetic Compounds.”
NELS, No. 16 (1986), 462-475.
- Williams, Edwin S. “On the Notions ‘Lexically Related’ and Head of a Word.”
Linguistic Inquiry, 12 (1981), 245-274.
- . “Implicit Arguments, the Binding Theory, and Control.” *Natural
Language and Linguistic Theory*, 5 (1987), 151-180.